

## 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成28年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	千葉大学	整理番号	003
プログラム名称	免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム		
プログラム責任者	中山 俊憲	プログラム コーディネーター	斎藤 哲一郎
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバルリーダーの資質を備えた優秀な学生を選抜するため、従前の選抜試験に加え、平成28年度のプログラム選抜試験では新たに英語によるグループ討論を導入し、選抜基準を高く設定している。このことにより、これまでは各年度13～15名が合格していたが、平成28年度の合格者は8名と少なくなった。なお、応募学生数についてはこれまでとほとんど変わらないとのことであり、一層優秀な学生の獲得ができると判断する。</li> <li>・本プログラムで養成すべきグローバルリーダー像を教員間で共有するため、新規に学長主導の特別FDを開催するなど、中間評価時の留意事項への対応がなされている。なお、学長主導の特別FDはこれまでに3回開催(毎回30分程度)しているとの説明があった。</li> <li>・プログラムにおいて行った「学生との意見交換会」及び「第2回ウィンターキャンプ」では、教員と学生が意見交換を行いグローバルリーダー像について討論し、共有している。</li> <li>・学生の俯瞰力や統率力を養うため、「第2回ウィンターキャンプ」、「第4回全国博士課程教育リーディングプログラム学生会議」、「高い教養を涵養する特論」等の企画・準備・運営・調整等を学生が主体となって行っており、教員もそれを奨励しているが、養成すべきグローバルリーダー像の趣旨に沿った内容かどうかについて吟味する必要がある。</li> <li>・WHOやUNICEFを始めとする国際機関に毎年度学生を派遣し、研修後は研修で得られた情報を研修報告会等で発表し、プログラムの学生全員で共有している。特にWHOには千葉大学の教員が2年更新で常駐しており、緊密に連携していきたいとのことであった。</li> <li>・本プログラムの全科目を医学薬学府の正規科目として維持する予定となっているなど、支援期間終了後も大学院教育として継続する体制が整っている。</li> <li>・米国のワシントン大学から招聘した教員と協力し、英語による国際水準の学位審査システムを今後作り上げたいとのことであった。</li> <li>・プログラム学生のうち約3割以上が医学部以外(薬学、保健学、理学)であり、バックグラウンドの異なる多様な学生が選抜されている。</li> <li>・カリフォルニア大学サンディエゴ校と部局間協定を締結し、千葉大学の研究室をサンディエゴ校に作り、そこで現地の学生を教育し、数名を千葉大学に連れてくるという能動的な体制作りを試みており、今後本プログラムにも展開することとしている。</li> </ul> <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中間評価での留意事項や指摘事項に対する取組として、英語によるグループ討論試験の導入や新規に学長主導の特別FDを開催するなど、その“仕組み”を作ったということは評価できるが、グローバルリーダー像の具体化については課題が残る。本プログラムのグローバルリーダー像の教員間における共有が依然として不足しているよ</li> </ul>			

うに感じられるため、学長主導の特別 FD などでも更に教員間での議論を深める必要がある。特に本プログラムが解決すべき課題は多種多様であり、そこには様々なニーズがある。是非そのニーズを出発点として、教員から学生に示していただきたい。今後、ニーズに関する議論を教員と学生で行い共有することにより、目指すべきグローバルリーダー像が具体化されるはずである。

- WHO や UNICEF を始めとする国際機関に毎年度学生を派遣しているが、参加した学生からは、全てスケジューリングされていて、研修内容も講義と見学のみだったので、過保護にならないようにもっと学生に主体性を持たせてほしいとの意見があった。また、学生にはグローバルリーダーのイメージが浸透し始めていると見受けられたが、一方で教員と学生の間にはグローバルリーダー像に対するギャップがある。グローバルリーダーに必要な多角的な力や俯瞰力を醸成するためにも、学生を過保護にせず、グローバルな人材として世界の最前線に送り出していただきたい。
- 優秀な学生が育ってきていると感じられるが、教員の中には、優秀な学生を大学に残したいという思いがあるようにうかがえた。また、学生の中にも、医師あるいは薬剤師といういわゆる安心感がある職への希望が背後にはあるようにうかがえた。しかし、グローバルリーダーとなるためにはこの部分は乗り越えなければならない課題である。そのため、教員の認識がそのまま学生の認識として反映される傾向にあるので、まずは教員間で目指すべきグローバルリーダー像を共有し、教員・学生間で更に真剣な議論をしてギャップをなくしていただきたい。
- 学生が大学に残らなくても、本プログラムの学生が世界で活躍すれば、千葉大学全体が高く評価されることが期待できる。是非そのような視点に立ち、既存概念を突き破るような学生を育てていただきたい。